

## 歌唱表現におけるグループ活動の展開法と実践報告 —各種パフォーマンスを通して—

### Expansion method and practice report of the group activity in the song expression

曾我 淑人

Yoshito SOGA

#### 要 旨

本報告書は、筆者が本学に赴任して以来、約30年にわたって主たる担当科目である「歌唱法Ⅰ・Ⅱ」及び「音楽実技」における表現活動の方法や意義について、学生の習得度を考慮しながら段階的に行った「人形劇」「オペレッタ」「ミュージカル」の三形態によるパフォーマンスを通して報告するものである。歌唱表現における活動開始当初からの最大の課題は、これらの科目を履修した殆どの学生が歌を好きであるにも拘わらず、人前で歌い演じることに対して極めて消極的であるという、保育者を志す者にとって看過できない状態を解消することにあった。このことを踏まえ、限られた授業時間で如何に効率的な指導を行うかについて、それぞれの実践時における問題点や過程を考察し、発表後における現存するアンケート調査をもとにその解決法を探った。その結果、グループによる上記の歌唱表現活動は、その形態により単なる歌唱にとどまらず総合学習的な学びがあり、実践者は多様な表現力を獲得すると同時に人格形成においても大きな成果を得ることが分かった。

#### はじめに

ここでは筆者が保育者養成校である本学に赴任した1980年から約30年を、主たる担当科目である「歌唱法Ⅰ・Ⅱ」及び「音楽実技」における歌唱表現活動について振り返るものである。

この授業のねらいとするところは後の項目で詳述するが、歌唱において最も重要なことは技術や声質の優劣ではなく「歌う楽しさを知る」ということであった。加えて、この科目を履修したほとんどの学生が歌を好きであるにも拘らず、人前で歌うことに対して拒否反応を示し極めて消極的であるという、保育者を志す者にとって看過できない状態を解消することにあった。また、個人指導の困難な大人数制のクラス授業にあって、どのような指導法がより効率よく目標を達成できるかについても大きな課題となった。

そこで筆者自身が演奏や指導など、これまでの音楽表現活動を通して体験したことを織り交ぜながら授業を進め、集団で他者と協力し合い目的を達成することによっていかに楽しく心豊かになれるか、またそのことが円滑な人間関係ほか多様な力の育成に繋がっていくかを是非体験してほしいと考えた。その結果、赴任後数年間の試行錯誤を経て、上述した課題の解決策として大きな成果を得たグループ活動に行き着いたのである。

ここではそのグループ活動の概要と段階的に実践した「人形劇」→「オペレッタ」→「ミュージカル」について報告し、終了後調査したアンケートやレポートを参考にその意義を探っていく。

## I. 「歌唱法」における課題と展開技法

本学園赴任時の音楽状況及び課題は以下のとおりである。

### 1) 授業形態および対象学生の音楽的状況

「歌唱法」は「ピアノ奏法」とは異なり本学には個人レッスンがなく、短期大学時代は週一回のクラス授業（1クラス60人前後）で、1年次の通年必修科目であった。

4年制大学になって定員数の関係で3～4クラス（50人前後）編成、2年次前期必修、後期選択、2008年度から担当者二人のオムニバスとなった。

「歌唱法」の科目を担当後数年間行った聞き取り調査によると、ほとんどの受講生が高校時代に音楽を履修していなかったことが分かった。更に、大人数制のクラス授業に加え時間数も充分でなかったため個々の能力や意欲の判定が容易でなく、各人本来の声を導き出すには極めて困難な状況にあった。しかも自分の声に劣等感を持っている者や人前で歌うことに強い抵抗感を示す学生が多く、限られた時間内で如何に効率よく音楽的資質を引き出し能力の向上を図るかが大きな課題となった。そして既に述べた様に数年間の試行錯誤の結果、基本的な知識や発声法、表現法などを習得しながら可能な限り多くの作品に触れた後、グループ活動に入っていくのが最も効果的だということを確認した。

そのきっかけとなったのは期末実技試験（独唱）の際、筆者が具体的な表現方法を示した上で各自の最も歌いやすい状況を自由に設定させたところ、小道具を使用する者、衣装をつける者、メイクをする者、バックコーラスや振り付けをする者など実に多彩で発想豊かなパフォーマンスが行われ、その結果各人の表現力が飛躍的に向上したことにあった。

このことから、時間的に個別指導の叶わないクラス授業の課題を解消する方策として、集団活動における他者の有する多彩な能力に加え、さまざまな媒体を有効利用することを思いついたのである。つまり協同学習の最大のメリットでもある「相互に学ぶ」という形態を意図的に取り入れたということになる。

その結果は驚くべきもので、集団における親しい仲間との共同作業であることの安心感からか羞恥心が薄らぎ、第一段階の「人形劇」では歌っている姿を他者から注視されていないこともあり、消極的であった受講生たちにもメンバー間の親密度が深まるに従って、次第に創作過程を楽しむ姿が見られるようになった。それはやがて音楽や台詞、演出ほかに対して改善を図っていこうという意欲的な姿勢に変わり、同時にグループ内に信頼関係が生まれていったのである。

その結果、ほとんどの学生が個々の持つ潜在能力に気づき自信を持ち始め、歌う喜びと共に仲間と心をつなげて作品を作り表現する楽しさを知ることとなった。

本授業に携わって数十年、その間筆者が一貫して行ったアドバイスは「歌唱において最も重要なのは音程の正確さや声の優劣ではなく、歌うことが“楽しい”と思えるようになること」であった。これは保育者に限ったことではなく、ジャンルを問わず歌唱指導に携わる者の最も留意すべき事柄だと考える。

## 2) 歌唱に関するアンケート調査

短期大時代に毎回のように行った意識調査を通して大よその状況は把握していたが、4年制大学になったのを機に改めてアンケート調査を行った。その結果、次のようなことが判明した。考察も併せて付記する。

調査日：2002年4月 対象学生数：300名

調査方法：5項目は2件法 6項目は自由記述

### —歌うことに関して—

#### 1、歌を聴くのは好きだが歌うのは苦手。

「歌うことは好きですか」の質問に、“はい”は87%、“いいえ”13%であった。

#### 2、複数なら人前で歌えるが、一人では歌えない。

「人前で、一人で歌うことは出来ますか？」の質問に対し65%の受講生が“いいえ”と回答した。

確かに親しくない人の前で歌うのは学生に限らずとても勇気の要ることで、歌うことは好きだと答えた学生が87%いたにも拘わらずこのような結果であった。

### —歌えない、歌いたくない理由—

#### 1. 音程やリズムが外れているのを聞かれない。

「歌っていて音程やリズムが変だな？と気づきますか」の問いに72%が“はい”と回答。ほとんどの学生が少しの音の狂いでも調子ハズレだと思い込んでいる。

#### 2. 自分は悪声のため人に不快感を与える。

しかし、「自分の声を録音して聴いたことがあるか？」の問いに71%が“ない”と回答した。これも他者に“変な声”などと言われたことがきっかけで、そのように思い込んでしまっているようだ。

#### 3. とにかく聴かれている、見られているのは恥ずかしい。

全体の70パーセントが“はい”と回答し、かなりの割合を占めている。

#### 4. 高音が出ない。

これは音域的な問題で女性に限られるのだが、地声から裏声への換声がスムーズに成されない学生がかなりの数を占め、このことが歌唱への取り組みへのマイナス要因の一つとなっているようだ。

#### 5. 歌おうとすると緊張で顔が引きつる、震えるなど心身の違和感や苦痛を覚える。

#### 6. その他、親しくない人の前で余り声が出ない。出したいくない。出るけれど苦手である。自分の歌声はとにかく聞かれたくない。「歌う」というだけで拒否反応が起こる、など。

この様に声を出す以前の問題は様々だが、意外だったのは歌いたくない理由の1及び2のような「思いこみ」の激しい学生が多かったことである。特に筆者は1の音程が悪くて駄目だと自覚している人、言い換えれば音程やリズムの狂いやズレの判断できる人に、俗に言う「音痴」は存在しないと考えている。

音声生理学の権威である米山文明氏によると、医学的には脳や聴覚中枢に特別な障害がない限り、音の理解が出来ない人は十万人に一人の割合だそうで、真正の「音痴」は極めて少ないと述べている。僅かな音程やリズムの狂いは、歌うことが楽しくなり声を出す機会が多くなればいつの間にか解消されるというのが長年の指導経験から得た筆者の持論である。因みに人前で何の抵抗もなく歌えるという学生は35%、人前で歌うのが楽しいと感じる学生は約300人中、わずか10～15人であった。その後もいくつかの質問に関しては毎年のように調査を行っているがほとんど同じ結果となっている。

### 3) 音楽環境について

上記アンケートの結果は当人の心身や資質及び技術的なことによるものだが、ここでは他の要因として考えられる環境について少し触れてみたい。

上述のアンケートの結果が示すように、楽しく歌えない学生の多くは心的要因の他に環境に起因する場合も大いに考えられる。その理由の一つとして、現在の若い人たちの音感を筆者の年代に比較すると、近年におけるメディア機器の飛躍的な進歩によって著しく発達していることが考えられる。それは「歌えない」と答えた学生の72%が僅かな音の狂いでも認識出来ることから推察され、そのことが歌唱への取り組みを消極的にさせているのではないかと考える。また、生活様式の変化によって地域社会での他者との交流機会が激減し、日常生活で大きな声を出したり歌ったりする機会が少なくなっているのも要因の一つだろう。更にはマンションなどの狭い居住空間や騒音問題、あるいは家族と一緒に歌うことがほとんど無いなどという家庭環境も起因しているようだ。

従って、その様な環境に育った受講生から如何にして声を引き出し能力の向上を図るか、教育現場での環境設定及び指導法は重要な意味を持っている。後述する学生のレポートからは歌唱表現に適した環境が整うと、自他共に予期しなかった様々な能力の発見があったことが窺い知れる。それは親しい仲間と協同していく中で、歌うこと、表現することへの興味関心の深まりと意欲に比例すると断言できよう。その意味において親しい同期生とのグループワークは、歌唱表現活動における極めて優れた人的環境であると考えられる。



## II. 音楽学習に於けるグループワークの重要性

### グループ学習について

筆者の幼児期は終戦直後だったこともあってあらゆる物資が不足しており、店頭に置かれた遊具はビー玉や面子など極限られたものであった。しかし一方で自然や人的環境には非常に恵まれており、海や山、川に囲まれた中で年齢を越えた集団遊びは、子どもにとって歓びに満ちた時間であり多くの学びの場でもあった。遊具は乏しくても互いに気心の知れた仲間とのそれは、廃材や草木を利用した様々な知恵が生まれ工夫されていった。そしていつまでも飽きることのない繰り返しによって遊びは更に深まり、より魅力的で豊かなものになっていったと記憶している。

日常的に行われていたわらべ歌遊びも同様に、集団という環境の中では遊びの進化に伴って興味関心が高まり、子どもたちの五感次第に解放されていく。そして喜びに満ちた声は艶と張りを増し、素朴なリズムやテンポ、間合いなどを伴った音楽活動が展開され、極めて自然なカタチで音楽的能力が形成されていくのである。この様な心のままの純粋な発声や行動は、子どもたちの豊かな感性や表現力を培うための重要な素地になっていると言えよう。ここでは集団遊びによる協同的な雰囲気の中で相互に理解し合い、一人では得ることの出来ない貴重な音楽体験が生まれるのである。

この様に集団活動は他者との協同的な楽しさを伴って、協同→意見交換→相互理解→信頼関係→共感→達成感・充足感へと繋がっていく。

このことは項目IVで詳述する筆者が行ったグループ活動に於いても、多岐に亘って重なるところがあると考え。特に親しい仲間との信頼関係に裏打ちされた連帯感は、大きな喜びやエネルギーを呼び起こす重要な要因となっていることが各種実践活動から窺い知れる。それは発表作品の完成度にも如実に反映されており、展開される発表者の熱い思いやひたむきさは、これまでに一連の発表を観て下さった学内外を含む人たちのアンケートによって、多くの人たちの心を捉え高い評価を得ていることから確認されるのである。

## III・総合学習としてのグループ活動

筆者担当の「歌唱法」における1「人形劇」2「オペレッタ」3「ミュージカル」のグループ活動は、学習内容を習得するための一手段であるものの重要な意味を持っており、3形態全てにおいて総合的な学習をねらいとしている。そこでは受講生の多様な能力と可能性を伴った協同作業によって潜在的な感覚が呼び覚まされ、音楽を通して多岐に亘る創造的な活動が展開されていく。そしてその過程で求められる主体性や協調性及び創造力、コミュニケーション力などは全て、受講生にとって今後の人格形成上重要な学びとなる。これらの総合的な学びは将来保育者として現場に立った際、場当たりの、表面的なものではなく、指導上起こり得るさまざまなケースに対して適宜対応可能な力となって発揮されるものと考え。

また、これら一連の活動は全て総合芸術的要素を有しており、各パフォーマンスは音楽を中心にして行われるものの、さまざまな感情を伴って話す、踊る、動くなど多彩な表現法が各集団で展開されていく。そこではグループ全員の相互協力・共通理解、そして何よりも作品に対

する“おもしろい”と“意欲”が不可欠な要素となっている。

その点音楽には他の媒体とは異なり人々を強く結び付ける作用があるため、比較的スムーズに意志の疎通が図られる利点があると考ええる。人心をほぐす音楽を通して主体的に取り組み協同の価値を見出し共有していくことは、良好な人間関係の構築上大きな意味を成すものと言えるだろう。同時に、失敗から学ぶことは多く、その意義を認め合いながら前向きに取り組むことも大切に、さまざまなハードルをクリアしグループ一丸となって目標を達成してこそ確かな力が獲得できるものと考ええる。

ところで筆者がこの一連の活動を推し進めるに当たって特に留意したのは、受動的な姿勢からは真の達成感や連帯感は生まれないと考え、型に嵌めることなく受講生の主体性を尊重すべく創造する力を重視し、そこに展開される表現に対して適宜アドバイスをしながら成果を期待するという姿勢でいることであった。

創作活動の具体的な方策として、発表全般に関する共通理解のための準備段階では、先ず作品の善し悪しを決定する最も重要なストーリー作り（ミュージカルは既存の作品）をグループ間で行い、その上で実践者と筆者が納得のいくまで何度も修正を試みた。

次の段階で行われる台本読み合わせによる言語活動は、互いの“おもしろい”や状況などの伝達技法（発声、声質、強弱・抑揚・間合い、テンポ、リズムほか）が多面的な角度から検討されるなど、話法やコミュニケーション力の育成に極めて効果的な実践となっている。また、同時進行する音楽（選曲・楽器・BGM）や演劇、ダンス等の活動に於いても同様に、各グループのオリジナリティーに富んだ創意工夫が成されていく。

更に舞台上における活動では、準備段階での意見交換で得た音楽や演出、振り付け、舞台美術、衣装考証、照明効果、装置、小道具など多様な創造的・芸術的活動が漸次具体化されていく。その間、グループ活動ならではの構成員による意見交換が盛んに成され、繋がり、の不足であったグループ内にいつの間にか信頼関係が築かれるのである。そしてそれは各自の自信へと繋がり、積極的な取り組みを通して協調性や創作力ほか、人格形成に必要なさまざまな力を獲得していく。これらのことは一連の活動における受講生の言動とレポート及びパフォーマンスに拠って、容易に窺い知ることが出来る。

このように音楽的能力は勿論のこと、言語、身体能力ほか思考、判断力など、総合的な学びのあるグループによる表現活動の意義は極めて大きいと考える。

#### IV・各種パフォーマンスの実際

四年制への改組以降2年次前期「人形劇」、後期「オペレッタ」、2～4年「ミュージカル」の発表を行った。

冒頭に示した歌唱における諸問題の解決方法として、発表形態の異なる上記三種のグループ活動を学生の音楽的表現力を考慮しながら段階的に実践した。

ところで、この活動を行うための前提として良好な人間関係が重要であることは既に述べたが、それは3～4週（ミュージカルは除く）という限られた準備期間内で活動をより円滑に展開する為に、開始時点で構成員同士がある程度親しい関係であることが求められるからである。その意味においてこの科目の時間割配当は2年次、又はそれ以上の学年で履修することが

必須条件になると考える。

次に各活動の内容及び展開技法をアンケート及びレポートの結果をもとに概説する。

なおアンケート項目は、2011年度のミュージカル出演者へのアンケート以外は、全て「発表を鑑賞しての感想」の自由記述とした。

#### —各種パフォーマンスの内容—

### 1. 人形劇（創作）

アンケート調査で判明した、人前で歌えない最大の要因である羞恥心や間違っただけの思い込みを取り除くために、歌唱表現の第一段階として人形劇用の装置を使って人形を操作し、顔や姿が見られていない状態で動植物などのキャラクターになって歌うことを試みた。

この人形劇の利点は、自己の想いやイメージをより豊かに表現するための手段として直接歌い語りかけるよりも、人形やペープサートなどの媒体を通し代弁させることによって羞恥心や不安から開放され、個々の潜在的資質や能力がスムーズに開発されることにある。

#### 【授業計画】

2年次前期の必修科目「歌唱法Ⅰ」で行う。

活動開始約二ヶ月前に学生による任意のグループ分けを行い、ストーリーづくりの課題を課す。また事前指導としてビデオを通して卒業生や上級生たちの発表を紹介、解説及び指導を行い、発表形態のねらいや具体的方法・学習内容等を示す資料Ⅰを配布する。

#### 「歌唱法——人形劇を創る」（資料Ⅰ）

##### 【ねらい】

- \* 創作人形劇の取り組みと実践を通して歌唱力は勿論のこと、人形操作の連携や動きに連動した話し方及び音楽、舞台美術、演出など総合的な表現技法を養い、同時にお話しづくりや音楽練習などを通して創作力、想像力、コミュニケーション力、主体性、協調性、自主性、責任性など保育者としての多様な能力を開発、習得する。 . . .
- \* 他者との技術的な優劣とか声の善し悪しといった比較ではなく、自分のおもしろさが如何に表現できたか、高められたか、といった価値観の獲得。
- \* 自分の殻を破ること。そして羞恥心や思い込みからの脱却と自己発見、自己充実を計り、併せて他者への理解を深める。
- \* 人前で歓びを以って歌えること、そして仲間と一緒に歌う楽しさを知る。
- \* 歌う、聞く、話す、動くことによって自らの音楽及び身体能力・感覚に自信を持つ。
- \* 結果以上にプロセスに重要な意味がある。如何に努力し協力し合えたか、グレードアップ出来たか、また意欲的に取り組んだかなど。
- \* 懸命に取り組んでの失敗は意義がある。失敗から何かを学ぶ取る。

##### 【創作過程の概要と留意点】

- \* 人形劇は総合学習を通して芸術的要素も求められるため音楽、台本、美術、演出など多様

な創意工夫が望まれる。そのためにはグループ内の信頼関係、結束力が重要である。

\* 道具や背景などは極力省き、創意工夫し、シンプルで象徴的なものでよい（倉庫の作品利用可）

\* 発表時間は10分まで。費用は各グループ2000円以内とする。

\* グループの人数は8～12人でメンバー構成は自由。

【ストーリー作り及び台詞】について

\* テーマ及びストーリーは基本的には子どもを対象とした内容が望ましいが迎合する必要はなく、現時点での自己表現に最も適した内容、手段であることが大切。

\* 明確なメッセージ性のあるものが望ましい。但し押し付けではなく「気づかせる」方向で。

\* 平板なストーリーは避け起伏に富んだドラマ性のあるもので、心に響く内容であって欲しい。単なる出来事・事実よりも「心のあり方」などをテーマにすると効果的。

\* 台詞に関しては、それぞれのキャラクターに適した個性的な表現法を考える。

\* 読み合わせの繰り返しは漸次新しい発想が湧くので大切。積極的にアイデアを出し合い、オリジナリティーに富んだストーリー（音楽や効果音などの分野も同様）に膨らませていくこと。

【音楽】

\* まずは、楽しさの伝わる歌であること。常に「歌うって楽しい!」というレベルを維持。

\* 歌の挿入は「子どものうた」ほか、情景、状況に即したもの4曲以上とする。

\* 一曲一節を原則とするが、部分的な繰り返しなどはインパクトがあり効果的な場合がある。

\* ソロ、重唱、合唱、替え歌、ハミング、掛け声他演奏上の工夫をするとより楽しくなる。

\* ピアノ以外の楽器、鳴りものの効果的な使用（伴奏やBGMなど。効果音は幼研で借りる。）

\* ブラスバンドや稽古ごとで得た特技の効果的な利用。

【演技、演出】

\* 媒体は人形（パペット）又はペープサート、影絵。

\* 人形操作はキャラクターや音楽に合わせた動きを心がける。その際人形の形や色は重要な役割を果たすため多様な工夫が必要。

\* ストップモーションやスローモーションの使用。

\* 台詞はキャラクターや状況に合わせて強弱、テンポ、リズム、ピッチの工夫が大切。

声の色を意識。

\* 客席へ話しかけたり一緒に歌ったり、観客参加型も人心を捉える一技法。

【創作過程】

・ 本格的活動として約一カ月行う。その間、筆者は音楽（歌やBGM・伴奏など）及びお話し作りほかの助言をする。また各グループの進捗状況によって適宜、歌唱及び台詞など各種表現指導を行う。

・ 最終週に約20組のリハーサルを各10～20分程度行いアドバイスをする。

・ 原則1組1回のリハーサルに立会うが、希望があればその限りではない。

## 【発表の結果】

ここ数年のアンケート及びレポートから主たる回答を以下に抜粋する。

【人形劇発表を通して】 回答者数562人から抜粋（重複回答含む）

## 『発表をした側の感想』

<ul style="list-style-type: none"> <li>・友達と協力して何か一つの事をやり遂げる素晴らしさ、気持ちの良さ。そして子どもに何かを伝えるために一生懸命になれる楽しさを学んだ。</li> <li>・グループ活動を通して自然に役割が生まれ、本当の意味の友達になった。</li> <li>・最初は歌い演じることに恥じらいがあったが、次第に他者に助言できるようになっていた。</li> <li>・最初は0からのスタートでも、みんなの意見で10にも100にもなった。</li> <li>・準備期間中、1日の生活が人形劇一色というほど楽しかった。</li> <li>・大人数が1つになり、1つの作品を作り上げ人を感動させることの素晴らしさを知った。</li> <li>・音楽は聴くだけでなく自分も参加することで、体全体で楽しめることが分かった。</li> <li>・先生が言っていた「グループ活動の1+1は3にも4にもなる」という意味が分かった。</li> <li>・一生懸命やることは相手の心を響かせることに繋がる。</li> <li>・自分でもびっくりするくらい声を出すことが出来、恥を捨てられたのは、本当に楽しみ始めたことがきっかけだったと思う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループ活動は自分一人では思いつかない様なことに気付く。そして大きなパワーが生まれる。人前で演じることが心地よく感じられるようになった自分に驚いている。</li> <li>・みんなが一つになって劇をやろうという気持ちが歌声にプラスされ、歌っている人の気持ちが伝わる。歌には人の心をつなぐ力があることが分かった。</li> <li>・歌やセリフ、声・音の工夫一つ一つが劇を生かす要素になる。</li> <li>・仲間たちとゼロから生みだすことの難しさ、楽しさを知った。</li> <li>・人の心を夢中にさせる劇はその人の心に深く、いつまでも残るものになる</li> <li>・自分たちの作品が宝物だと思える。音楽は物語を夢中にさせ、新しい世界を作り上げる</li> <li>・相手を引き立たせる役目の重要性を知った。</li> <li>・何かを成し遂げることは一人より集団の方が大変だが、その達成感と欲びは何倍にもなって返ってくる。</li> <li>・皆の真剣さ、一生懸命さ、良いものを作ろうという姿に気付き、その大切さを知った。</li> <li>・「自分がここまで表現出来るのか」と新しい自分を発見することが出来た。</li> </ul>
--	--

この発表で指導上特に留意したのは、装置の裏に回って各自の音楽や言語表現活動を観察することであった。そこでは構成員各自が役に成りきりろうとして懸命に取り組む姿があり、通常の授業では見かけられない楽しさに満ちた表情や潑刺とした声がエネルギーに展開されている。それは同時に、この授業の「ねらい」であった「自分の声に対する思い込みや羞恥心を払拭する」ということが達成できたことを確認できる瞬間ともなっている。

なお、学内での発表後何度か手直しをし、十数年間附属幼稚園の園児を対象に発表を行い、子どもたちの反応に対応しながら表現力の更なる向上を図った。

## 2. オペレッタ（創作）

第一段階の人形劇で気付いた各人各様の能力を高めるために、ここでは他者に見られていることを意識しながら表現力のアップを図っていく。また舞台空間や他者との関係性に留意し、話す、踊る、演技する等を伴った幅広い歌唱表現を体得する。

舞台発表は人形劇とは異なり、歌や演技ほか相手の言動に対しての即応力ほか多様な能力が

求められるため、取り組み方次第で習得する事柄は極めて多岐にわたる。

また歌唱表現活動を補助促進するための演出、演技、道具製作、衣装、照明、ダンスなどについて十分な検討と試行錯誤が求められる。

#### 【授業計画】

2年次後期の選択科目「歌唱法Ⅱ」で行う。

第一段階の「人形劇」と同じく活動前に資料を配布し、ビデオ紹介及び指導を行った。

活動開始約二ヶ月前にグループ分けをし、ビデオ指導及び解説を行い、発表形態のねらいや学習内容・方法を記した（資料2）を配布した。準備期間は約一カ月半とし、最終週に発表を行った。

資料2は各項目ともに人形劇に重なる部分が多いが、オペレッタ独自のものを記す。

#### 「歌唱法——オペレッタを創る」（資料2）

##### 【ねらい】

- \* 人形劇と異なり相方の歌唱、言動を見ながら臨機応変の対応が求められる。
- \* 他者の演技やダンス、歌、そして取り組む姿勢からの学び（以下人形劇に同じ）

##### 【創作過程の概要と留意点】

- \* 人形劇とは異なりダンスや演技力が要求される。
- \* 発表空間も広く位置関係や出入りの場所、タイミングなどの対応力が求められる。
- \* 歌唱は勿論、せりふや表情の豊かさが求められる。
- \* 大道具、背景などの製作は極力無くし、シンプルで象徴的なものでよいが、衣装についてはキャラクターにふさわしい独創性のあるものを期待したい。
- \* 発表時間は30分以内とし、費用は各グループ3,000円とする（以下人形劇に同じ）。

##### 【ストーリー及び台詞】について

- \* 発表時間が30分以内と長いと、音楽も含め各シーンの時間配分に配慮。

##### 【演技、演出】

- \* 情景や状況、キャラクターに合わせた動きを心がける。
- \* メイクや衣装は重要な役割を果たすので工夫が大切。
- \* ダンスのあて振りは極力避ける。いくつかのパターンを組み合わせる方法もある。

##### 【創作過程】

- \* 内容は人形劇にほぼ同じだが、異なるのは身体表現が加わるため意欲的な取り組みと練習回数が求められる。また舞台づくりにも一定の工夫が望まれる

#### 【発表の結果】

#### 【アンケート及びレポートから】

—発表をした側の感想—

回答者数356人から抜粋（重複回答含む）

- ・自分はこんなに歌うことが好きなのだという発見ができた。
- ・グループ活動の意義は非常に大きく、その大切

- ・友達の大切さ、人前で歌ったり、踊ったり、演技をすることの楽しさ、自分の意見を言う勇気を学び得ることができ、私自身一回り大きくなっ

さを改めて実感した。

- ・大きな声で歌うことがこんなに気持ちいいと知ることができた。
- ・人前に立って演技することが自分でもできるものだと思えた。自信がついた。オペレッタをやっていたら損をしていたと思う。
- ・グループで一つの作品を作り上げる喜びや自信で満ち溢れました。いまでもあの感動が忘れられません。
- ・お互いを思いやる気持ちや支えあう事の重要性を感じた。何より自分自身が成長できた。
- ・グループ活動だからこそできること、作り上げる苦労と楽しさは、これから大いに役立つと確信している。
- ・仲間と協力することの大切さや信頼する事の素晴らしさ。作ることの楽しさや達成感。
- ・一番うれしかったのは新たな自分を見出したこと。同時に友達の新しい面も発見できた。
- ・大勢の前での発表は良い経験となり気持ちが良かった。歌唱法で新しい表現に出会えた。
- ・自分は人前で演技や歌なんて絶対ありえないと思っていたが、この活動を通して色々な力がつき自信に繋がった。
- ・殻を破って前に踏み出すことができ、自分でもまだ見たことのない部分が見えた。
- ・グループ活動だからこそ感じられる仲間の存在のありがたさや温かみ。
- ・どうしたらもっと良くなるのか友達と可能性を追求する楽しさが感じられた。
- ・今までの自分では想像できない事に挑戦できたと思うし、とても成長できた。
- ・発表後の達成感是非常に大きく、終わった後自然と涙が出てきました。絶対に経験するべきことであると思う。
- ・大人数の前で堂々とやることであんなにも自信がつくものだ初めて知った。
- ・大学生活でこんなに集中して頑張ったのは初めてです。自分に自信を持つことができた。
- ・私の中で何枚殻が破れたか分からないが、始めた時の自分とは全然違う！！
- ・歌は自分が感動した分、聞く人にも想いが伝わり感動させることができる事を知った。
- ・歌を歌う事で一番大切なことは『気持ち』だと気付いた。心を打つ歌を私も歌いたい。
- ・歌う事は自分を表現しやすいし、何よりも歌う事を好きになれた事がとてもよかった。
- ・人に見てもらい喜びを感じた。度胸がついた。
- ・出来上がりではなく、それまでの過程に自分がどれだけ多く苦心して考えるかの大切さ。

たと思います。

- ・このような貴重な体験をすることができて本当にうれしいという言葉だけでは表現しきれないくらい胸がいっぱいです。幼教バンザイ!!!
- ・歌が下手な私でも、動きや心で伝わる事がわかった。
- ・オペレッタをやる前は「絶対にできない」と思っていたが、「できる」という自信が付いた。
- ・表現することがとても楽しく、緊張することも気持ちよく感じた。
- ・友達の意外性を発見したことに、驚きと嬉しさがあった。
- ・やる前の私は人前で歌うことが嫌で仕方ありませんでしたが、いつしか皆に負けられないように大きい声で歌おうと思うようになっていきました。
- ・つらくて逃げ出したくなったこともありましたがそれ以上に素敵でプライスレスな経験と仲間を得ることができました。この仲間に出会えて協力し、助け支えあえ、作品を完成させたこと、そのすべてが私の喜びと宝物です。
- ・歌が嫌いで苦手だったが大きな声を出すことも楽しくなり、自分を表現しようと前向きに考えられた。自分の変化に驚きと同時に成長した姿を友達に見てもらえて嬉しかった。
- ・誰でも人前で歌ったり演技することは恥ずかしいと思う。しかし友達とオペレッタによって恥ずかしさも次第に無くなりむしろ楽しさでいっぱいになった。本番は胸が震えた。この経験は実習でも必ず役に立つと思うし、自分の力にもなったと思う。
- ・以前は、静止して歌うだけだったけれど、今は歌うと自然に体が動くようになった。
- ・初めは、自分たちのやっていることが幼稚でばかばかしく思っていたが、今は子どものために下手でも真剣に演じることはとても素晴らしいと感じている。歌う事が何よりも苦手で歌が大嫌いな私が、オペレッタを通して歌を歌う事の楽しさ大切さを知りました。歌というものが本当に身近に感じられるようになりました。
- ・引っ込み思案な性格の私がこんな積極的になれるとは自分でも想像できなかった。自分への自信になった。確かに辛いこともあったがそれ以上に得るものが多かった。
- ・あの緊張感の中で歌っていたのだと思うと自分でも驚きます。
- ・人前で上手に演技ができず、殻を破れずにいた私ですが、今回オペレッタをやって、役になりきって演技することが凄く楽しいと感じた。
- ・大学生活で一番充実していたのは、このオペレッタをしていた時。初めは恥ずかしかったが自分に自信がついた。

- |  |  |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・今まで感じた事のない気持ちでいっぱいになり、一生このような体験はできないだろうと思う。メンバー全員精一杯演じ切った時の感動は忘れられない。</li> <li>・今までは、人に頼らず一人でため込んでいました。でも、つらい時はつらい、やってほしい時は協力してほしいと言えるようになった。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・人前に立って何かをやることが大の苦手な私にとってオペレッタは無謀といえるほどでした。自分にはできないと思っていたけれど、その気持ちは頑張ればできるに変わりました。なによりうれしかったのは楽しんでやることができたことです。自分なのに自分ではないように思いました。</li> <li>・人間関係の深さや繋がり大切さ。相手を思いやる気持ちの芽生え。</li> <li>・大学生活でこんなにも一生懸命に必死に一途に頑張ったと誇れることは他にないと思います。人前で何かをやるのが嫌だった性格だったが変わることができたと思います。</li> </ul> |
|--|--|

以上のように、最初の段階ではグループ活動に対して否定的であったり、舞台発表への拒否反応を示した者も数多くいた。しかし、オペレッタ発表終了後にこの活動をマイナスに捉えた受講生は皆無であり、個人差はあるものの極めて有意義な学びがあったことが推察される。特に自分自身の多様な可能性を見出し自信に繋がったことにこの活動の大きな意義があると考えられる。

ここでの指導上の留意点としては、歌うことはおろか人前で話すことさえ困難な学生がいるなど個人差も著しいため、歌唱や話術、演技、ダンスにおいて表面的な技術（優劣）に余りとられないことである。

先ず人前に立つことから始まって一喋る→動く→歌う→踊る→表情を伴って表現する一を各人のレベルに合わせ注意深く見守っていくことが大切である。第三者が発表のみを見て「学芸会並み」と批判するのは極めて短絡的で、グループ活動は結果や他者との比較ではなくその過程が重要な意味を持っている。個人差はあるものの、各人の表現力はスタート時に比較すると飛躍的な成長が窺え、発表後のアンケートには心身の発達を含む集団活動でのさまざまな成果が如実に示されている。

次に鑑賞した側の感想を記す。

#### —鑑賞した側（下級生）の感想—

回答数約320人から抜粋（重複回答含む）

- |   |   |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもが楽しみながら大切なことをごく自然に教えてくれた。</li> <li>・二日連続観てストーリーが分かっているはずなのにドキドキ、わくわくでした。</li> <li>・すごく心に残るお話ばかりで忘れかけていた大切な心の中のものを思い出させてくれた。</li> <li>・先輩達のオペレッタをととても楽しみにしていました。その理由は昨年高3のとき『桐華祭』の発表を観て震えあがるほど感動したからです。</li> <li>・この聴衆参加型のオペレッタは子どもを集中させる効果があると思う。</li> <li>・出演者の楽しさが直接私に伝わってきて「あの</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもも大人も魅了してくれるオペレッタの力は素晴らしいです。</li> <li>・先輩達は役そのものになってしまったような不思議な感じでした。</li> <li>・絵本の中に入った様な空間に楽しく魅力を感じ一瞬にオペレッタのファンになりました。</li> <li>・見る側だけの感動ではなく、発表側の感動も味わいたい。</li> <li>・普段から充実した生活を送っているからあんなに感動的な劇ができるのだと思いました。</li> <li>・ストーリー性の豊かさなど驚きの連続でした。</li> <li>・普段映画など感動的なシーンに触れても泣かな</li> </ul> |
|---|---|



仲間に入りたい!」と口に出して言ってしまいました。

- ・他大学の人に「去年観たけど凄かったよ」と言われて期待していましたが、とても感動しました。一人ひとりが主役に見えました。
- ・私がその物語の中にいるのではないかと思えるくらいのめり込みました。
- ・私の想像していたものとは全く違って、正直こんなに感動するほど素晴らしいものだったとは思っていませんでした。子どもたちも私達と一緒に共感していた。
- ・私はこのオペレッタを通して幼教の学生の偉大さを知りました。
- ・短い時間の作品の中でたくさん考えさせられるものがありました。
- ・十文字のオペレッタが凄く良いというのは前から聞いており総合演習の先輩からも「絶対感動する、観な!」と言われていました。
- ・先輩の頑張りや団結力、そして達成感が私達観ている側にすごく伝わってきました。
- ・二日間子どもを観察しましたが、飽きることなく熱心に見入っているのに驚きました。
- ・人を感動させることができる先輩達はとても輝いて見えました。
- ・それぞれ個々のキャラクターが際立っていてみんな魅力的でした。
- ・とても感動し、先輩達の人を引きつける力の凄さに驚き吸いつけられる様に見入っていた——今でもあの感動の余韻が残っている。
- ・伝える側の心が大切だと知りました。また人間関係も学べる場になるのだと感じた。
- ・オペレッタが始まった途端私の胸は高鳴りました。
- ・それははるかに私の想像を超えるものでした。
- ・別世界に入ったかのように一気に引き込まれていきました。

い私がオペレッタを見て涙ぐみました。

- ・想像以上のものに驚きを隠せなかった。何よりも驚いたのは劇その完成度です。
- ・先輩のパワーに圧倒されっぱなしで一歳しか変わらないのに大きな存在で尊敬しました。
- ・私にできるか不安だがでも精一杯頑張って先輩に少しでも近づきたいと思った。
- ・はっきり言って私は人前で歌うことが嫌いである。その私がついつい劇中の歌を口ずさんでいた。
- ・手遊びの歌声が聞こえてくると自然と手が動いてしまうことなど数ヶ月前まではありませんでした。
- ・一年後にこんな劇を作れるのかと不安な気持ちになりましたが、絶対先輩達よりもっと良い作品を作りたいです。
- ・本当に感動した。ストーリーに人として大切なメッセージがあり教育番組の様でした。
- ・言葉と音楽はとても似ていると感じ、音楽が人に伝える力の大きさを知りました。
- ・お互いのことをきちんと理解しあい、相手のために何かをするということの大事さを改めて気づかせてくれた。
- ・自分の感情を正しく表現することの大切さと相互理解。自分に自信を持ち勇気をもって何かに飛び込んでいくことの大切さなど、いろいろなことを学ぶことができた。
- ・頑張れば頑張るだけいいものを作ることができ人を感動させると同時に自分も感動し成長するのだと思った。
- ・期待以上の劇で、心から楽しく一生懸命演じているのが伝わってきた。また努力や苦勞が見えないほど先輩たちが楽しそうに演じていて驚いた。
- ・私も来年は先輩達のようにできるか不安だが先輩達のようにステージで輝いてみたい。体全部を使って何かを表現するって素敵だと思った。先輩達に勇気もらった。
- ・一人ひとりの個性や良さが発揮することのできる場となっていることを感じた。

以上、鑑賞した側の回答では各人が様々な角度からグループ活動を捉え、驚きの中にも冷静に自分を見つめその意義を理解している様子が窺える。また発表への不安を抱きながらも「先輩の発表を凌ぎたい」とか「自分を見てもらいたい」という前向きな姿勢が芽生えており、次年度生に対し大きな影響を与えていることが確認される。

そしてこの活動で特筆しておきたいのは、約30年に亘るオペレッタ発表史上、4年制大学に移行して二度ではあるが、既にこの科目の履修を終えた4年生が、卒業研究の多忙な時期（12月最終週発表）に、2年生に交じって特別参加を願い出たことである。

これは筆者の全く予想していなかった事態だっただけに、大いに驚くと同時に極めて感慨深いものがあつた。

筆者は既に述べたように人形劇も含め創作発表のねらいとして、受動的な活動ではなく構成員の主体的な関与を促すための指導に徹したつもりであつたが、この発表はそれを見事に具現化してくれたものであつた。しかもその内容は創る、歌う、演ずる、話すほか全ての表現法において独創的な発想や工夫が随所に見受けられ、筆者の予想をはるかに超える素晴らしい内容で、二年生の感性や創作意欲を大いに刺激するところとなつた。それはミュージカルを含めた一連の発表を通して、構成員の内に喚起された「表現することの喜びのあらわれ」であつたと確信している。そこで披露される姿からは、どの発表者にも音楽を通して表現する喜びと自信に満ち溢れ、今後指導者として自立し得る十分な知識と表現力を獲得したことを確信した瞬間でもあつた。

なおこのキャスティングは後日くじ引きで決めたということを知り、更にその意を強くしたのであつた。

そこで、筆者の琴線に触れたこのパフォーマンスの動機を知りたいと思い、出演者全員（卒業生23名）にアンケート調査を行った。その一文を紹介したい。

「卒業を目前にして、先輩の演じたオペレッタに刺激を受けどうしても取り組みたいと思ったのがその動機である。この活動をするに当って『やりたい！（表現活動がしたい）グループ』を作り、完成度の高さよりも『楽しく』をモットーに台本作りに挑戦した。そして参加者全員が音楽、ダンス、台本、舞台構成、演出、舞台美術ほか得意分野で懸命に取り組んだ。準備期間中大きな試練があつたが、やり遂げたこと、仲間との絆を再確認できたこと、目標であつた「楽しく」ということが達成できたことで乗り越えられたと思う。この仲間や経験が、これからの保育者としての私の心の支えとなり、目標を見失うことなく何事にも取り組んでいけるだろう。」

### 3. ミュージカル作品「アニー」の公演（桐華祭 於：431教室）

2, 3, 4年生を対象にした授業課目である「音楽実技」の一環としてミュージカル作品を取り上げ、公開演奏を行う。これまでの段階的に行ってきたグループ活動の集大成として、協同学習による人間関係や協調性・主体性ほか、感覚、技術など総合的な育成に加え、芸術的な側面を持つ作品の完成と「表現する喜び」を享受することをねらいとする。また歌唱に関しては、媒体や身体表現に依存することなく、自己の描いた情感やイメージが的確に表現できる力を習得することを最終的な目標とした。更に、一般公開演奏として大学祭を目標に取り組み、客観的な視点からその成果を学内外に問こととした。

#### 【授業計画】

前期授業開始と同時に過去の記録ビデオ数本を鑑賞し、筆者を含め経験者との情報交換を行う。開始時は各自の音楽観やこの活動における課題、魅力等を共に考え、今後の方針について入念な話し合いを行う。ここ数年は受講生の希望によりミュージカルの名作「アニー」を取り上げ、グループ活動を通して総合的な学習を行い、人間力を身につけることをねらいとした。

この作品発表は授業の一環として行っているが正規の時間数では不十分のため、学業に支障を来たさえないよう夏休みに集中的な練習を行っている。なおこの作品の上演時間は3時間弱であるが、筆者が約2時間に改作し、一部分原作には無いシーンを付け加え娯楽性のあるものにした。

### 【活動過程】

他の活動との違いは受講生が2、3、4年生と年齢差があり、表現活動及び人間関係において異年齢の学習集団ならではの多様な学びがある。

発表までの過程は以下のとおりである。

・音楽稽古→台本読み合わせ→ダンス稽古→立稽古→リハーサル→ゲネプロ→発表  
その間、キャストイングのためのオーディションを行う。

### 【発表の結果】

【鑑賞した側のアンケート】 回答者472人から抜粋（重複回答含む）

<ul style="list-style-type: none"> <li>・頑張るということの素晴らしさや協同する仲間 の存在が大きいことを教えてくれた。</li> <li>・私も自分の殻から飛び出したい。本当に何もかもがすごく夢中で見ていた。</li> <li>・笑いや感動を与えられたのは、この学校で学び 経験したすごく大きな力だと思う。</li> <li>・目標に向かって進んでいく人々の凄い力を見た ような気がする。</li> <li>・目を瞑っていてもキャストの気持ちや表情が想像 できるような歌声</li> <li>・観ている私たちが一気にアニーの世界の中に引き 込まれてしまう位のパワーがあった。</li> <li>・歌の力強さや演技の凄さに思わず涙が出そうに なる場面が何回もあった。</li> <li>・自分の役に対する思い入れ、なりきる凄さに驚 いた。・感動と驚異の舞台だった。</li> <li>・今まで積み上げたものは凄い量で、凄い力を持っ ているのだと思った。</li> <li>・公演の質の高さ。歌も台詞もダンスも自然に、 堂々と、流れるように表現している</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・歌が終わったから拍手をするのではなく、拍手 をしたくなる感じだった。</li> <li>・一人ひとりが努力して、頑張って、それが集ま るともっともっと素敵なものになり、周りにも、 それが伝わるのだと感じた。前へ前へと進んで 行こうと強く思った。</li> <li>・これから自分達の心の中に、夢中になれた分 だけ、自分の力となっていく事だと思う。</li> <li>・保育者を目指している人たちが、なぜここまで 歌えて踊れて演技して客をひきつけられるのだ ろうと不思議に思った。前へ前へと進んで行こう と強く思った。</li> <li>・全員が主人公のようで、一人ひとりがとても生 き生きしているように見えた。</li> <li>・是非やってみたい、成長できそう、自分の殻を 破りたい！</li> <li>・キャスト全員が主役のよう、一人ひとりが主役 になれる</li> <li>・本物よりも心に残る‘アニー’で出演者は保育 者となるにふさわしい人々だと感じた</li> <li>・431教室にいることを忘れてしまった。</li> <li>・鳥肌がたった、目が離せない、泣いた。幼教は 素晴らしい！十文字でよかった！</li> <li>・一つにまとまりが、何倍ものパワーになっていた と思う。</li> </ul>
---	---

—これまでの発表作品（ミュージカル）—

- 1998年・・・ 青島広志作曲 「11匹の猫」（音楽劇）  
1999年・・・ リチャード・ロジャー作曲 「サウンドオブ・ミュージック」  
2000年・・・ チャールズ・ストラウス作曲 「アニー」

2001年・・・・	アラン・メンケン作曲 「美女と野獣」
2002年・・・・	チャールズ・ストラウス作曲 「アニー」
2003年・・・・	アラン・メンケン作曲 「美女と野獣」
2004年・・・・	休演
2005年・・・・	チャールズ・ストラウス作曲 「アニー」
2006年・・・・	〃 〃
2007年・・・・	〃 〃
2008年・・・・	〃 〃
2009年・・・・	〃 〃
2010年・・・・	〃 〃
2011年・・・・	〃 〃

発表は短期大学時代の1998年～2002年までは卒業演奏会として、それ以降は学園祭のプログラムの一つとして行なってきたが、学生の発表に向けての意識の高まりに伴い作品及び表現法の探究が深まり、年々完成度は増しつつある。その結果、学内の教職員の方をはじめ多くの学生や一般の方たちから高い評価を得てきていることがアンケートやメッセージを通して伝えられている。

その要因は音楽専攻学生には見受けられない舞台や作品に対する真摯な姿勢と熱いおもいに裏打ちされたパワフルなエネルギーが、声の善し悪しや技術の有無を超越し、聴く人の心にストレートに伝わっていくからだと推察する。そのことはこの発表を鑑賞した50代の男性の方からの次のような感想文からも窺い知ることが出来る。

——完璧を目指すプロのミュージカル、それはそれで素晴らしいと思います。一方普通の学生が力を合わせて完成させたミュージカル。そこに至るまでの努力や苦悩の跡が舞台上に見え隠れしてプロ以上の感動を与えてもらいました。一中略— 観る者にとって「人の心を揺さぶるものは、卓越した技術とか才能以上に『熱意』や『ひたむきさ』なんだなあと、今更のように痛感しました——。

その他、毎年のように一般及び教職員の方たちから年齢を問わず、賛辞と応援のメッセージをたくさん戴いている。

この様に歌唱において最も重要なことは声の良し悪しや上手下手ではなく、出演者一同心を一つにして熱いおもいや歓びを懸命に歌い上げることだと考える。また、学生自ら「表現できた!」とか「こんなに歌えるんだ!」ということを確認し、他者がそれを認め評価され初めて自分の力を確信し歌うことが楽しくなる。そしてそれに伴い声も張りを帯び表現力も豊かになっていく。事実、目の前でその様な光景が毎年のように繰り返されているのである。

因みに演奏上、シーンによって求められるテクニックや良質の声は、この活動においては「歌うことが楽しくなる」ことの相乗効果として派生する確率が極めて高いようだ。

またミュージカルに欠かせないアンサンブルは、互いの思いが一致した時に美しいハーモニーとなるが、ここでは特にこのことが当てはまり、聴く人の耳に快く響くのは声の善し悪しではなく結束したチームワークならではの発表者全員の心の調和があるからだと推察してい

る。このことから、グループ活動では他者との親密な関係が重要な意味を持っていることが言えよう。

ところでここ2, 3年の傾向として受講生の資質が大きく変わりつつあるのを実感している。以前は「自分もあの舞台に立って歌いたい!」「たのしそう!」という学生がほとんどで練習も余り心配なくスムーズに運んでいたが、最近では「苦手意識を無くしたい!」とか「内向的な性格を変えたい」など重い課題を持って履修に臨む学生が増えている。

とても良い傾向だと思って歓迎しているが、当人にとっては練習過程でかなり葛藤があるようで、開始後しばらくは全体の進行状況が芳しくないようだ。それも無理からぬことで、この活動では当人がそれまで忌避してきたこと、いわゆる人前で歌い、喋り、演ずることが一度に求められ、その為の大変な勇気とエネルギーが必要とされるからである。

ここ二年間の受講生の様子から開始当初は筆者をはじめ経験者の誰もが「今年は発表できるだろうか??」と非常に危惧したが、結果的に大変身を遂げた姿を目の当たりにすると、「努力って素晴らしい!」「環境が整うと誰もが本来の力を発揮できるんだ!」と、驚きと感動をもって眺めている。

そこで履修者の意識が大きく様変わりした今回、公演を行った32人を対象に例年行っている質問項目を変更し、アンケート調査を行った。その結果は以下のとおりである。

【発表者のアンケート】 対象者：2011年度出演者32人 同年12月調査

1. 次の三つの内該当するものに○をつけて下さい。

イ) 入学時人前で歌うことが非常に苦手であった。

ロ) 余り抵抗はなかった

ハ) 全く抵抗はなかった

回答 イ) 16人、ロ) 15人、ハ) 1人であった。

人前で歌うことにもともと抵抗感のなかった割合は先述した必修授業の「歌唱法」のアンケートとは若干異なるが、しかしミュージカルのような大舞台に挑戦しようとする学生の中にも、もともと人前で歌うことが非常に苦手であった学生が半数もいたのである。そこには学園祭で鑑賞した「アニー」の公演やビデオ録画に触発され、「自分を変えたい!」という意欲が湧き起こったことも要因として考えられ、その内的変化において極めて重要な意義があると言えよう。

2. 「アニー」に取り組む前と体験後の貴方にどのような変化がありましたか(抜粋)

・自分の声に自信がなかったが、歌うことが楽しくなり早く歌いたい!と思えるようになったことが驚きであった。  
・相手にしっかりと自分の意見が言えるようになった。  
・強い劣等感を持っていて「私なんか…」と思っていた私が「こんな素晴らしいことが出来るんだ!」と胸を張って言うことが出来るようになった。

・一人でいることが大好きで集団行動が面倒くさいと思っていた自分が、集団でいる事が楽しくなった。  
・人と接する時無意識に心の壁を作っていたが、心を開くことが出来るようになった。  
・サークルの部屋で引き籠るしか空き時間の過ごし方を知らなかった私に、居場所が出来た。  
・いつも自分に自信がなく誰かの後ろに隠れているような人間だったが、公演では見てもらうこ

<ul style="list-style-type: none"> <li>・様々な人との関わり、それぞれの思いに触れ自分自身の考え方が広がった。</li> <li>・「アニーをやっているから」と言い訳をしたくなかったので以前より勉強をした。一つのことに真剣に打ち込むと、他のことも真剣になれる自分に驚いた。</li> <li>・人見知りが激しくいつも下を向いて歩いていたが、前を向いて歩き大きな声を恥ずかしいと思わず出せるようになった。</li> <li>・他者と深く関わることで人は成長できるのだと感じた。自分を出すということはいいことで、これまでの自分とは違った人間になれてよかったと思う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・とを楽しんでいる自分に驚いた。</li> <li>・前を向くことすらできない私には人前に出る、歌う、踊る、全て苦手で「どうせ無理だ」と思っていたが、周りが私を認めてくれたから私も私を認めることができた。</li> <li>・自分には誇れるものが無くコンプレックスばかりだったが自分の輝く場所が作れた。</li> <li>・人前に出ると緊張の為身体が硬直し喉が閉まって声が出なかったが、大勢の前でも大きな声で表情をつけて話せるようになった。</li> </ul>
--	--

### 3. この公演で得たこと

<ul style="list-style-type: none"> <li>・人間関係の学び。苦楽を共にした仲間との絆、そして居場所の発見。</li> <li>・今まで知らなかった自分と出会うことがたくさんあった。</li> <li>・自分を客観的に見つめることの大切さと他者との調和。</li> <li>・辛いことを乗り越えての嬉しいことや楽しいことは、普段のそれよりも比べものにならないくらい嬉しいこと、楽しいことでした。</li> <li>・大学でもこんなに夢中に熱くなれるものがあるなんて思ってもみませんでした。</li> <li>・この人がいないと自分は生かされないという、一人一人を大切に思う気持ちがこんなに強かったのは初めてです。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・以前に比べ自分に自信が持てるようになったことと、素晴らしい仲間に出会ったこと。</li> <li>・周りの皆が引っ込み思案だった私の変化に驚いていることが嬉しかったが、何よりも自分自身がこの変化に驚いた。</li> <li>・“自分にはできない”と諦めるのではなく、自分を信じる機会を与えてもらった。</li> <li>・思いっきり表現することが恥ずかしいことではなく、こんなにも楽しい事なのだと知った。</li> <li>・自分の中にもう一人の自分が出来ていくのが分かって、不思議な感じで嬉しかった</li> </ul>
--	---

### 4. ご家族の感想

<ul style="list-style-type: none"> <li>・葛藤を乗り越えた時の姿、そして最後の歌での涙は素晴らしいと思いました。</li> <li>・この公演の魅力は一人ひとりのひたむきな努力が一つになった時のパワーでしょうか。娘が夢中になった理由が分かります。</li> <li>・一昨年の公演を見て、この学園に入学できたら娘にも是非挑戦してほしいと思ったくらい心を惹かれ感動しました。学園祭だけでは勿体ない気がします。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・引っ込み思案な娘の歌や踊りにびっくりし、両親ともども涙してしまいました。</li> <li>・娘の普段見せることのない面、表情は新鮮な驚きでした。</li> <li>・人前で目立つ行為とは無縁に思っていたが、普段とは違う娘の姿に目を見張りました。こんなに感動したのは久しぶりです。</li> <li>・すごい！ただその一言です。みなさん輝いていました。</li> <li>・家族ではなかなか見せない娘のエネルギーに驚き、成長を実感しました。</li> </ul>
---	---

以上のことから、一連のグループ活動を通して学生が習得したものは、音楽にとどまらず多種多様なことがらに及んでいる。このアンケートにも見られるように最近の学生は内向的で自己表現が苦手になったと言われており、学生生活において他者とうまく関われない若者が多く、

身体のみならず精神的な問題を抱える学生が年々増えつつあるようだ。

その様な中であって、歌唱を通してのグループ活動はこのことを解決しうる非常に効果的な方策の一つではないかと考える。

歴代の発表者達が口をそろえて筆者に残していくのは“もう一度歌いたい！”“ずっとこの活動を続けてほしい！”という心からの願いである。

そこには「歌うって楽しい！」ということに加えて「グループ活動は人を変えてくれる！」という後輩へのメッセージが託されているのではないかと推察している。筆者も同様、そうなることを強く願うものである。

発表者にとって終演後から今日まで続いている集いは、信頼関係に満ちた家庭的で温かく居心地の良い「居場所」となっているようだ

## おわりに

本学に赴任しこの授業を担当して約30年、毎年のことながらグループ活動に拠って興こる学生たちの大変身ぶりに目を見張っている。この授業が始まった当初は毎年のように相当数の学生が「歌は苦手、思うように声が出ない、人前ではとても歌えない、話せない、動けない、」など各人各様の問題を抱えながら、不安な思いで挑戦したようである。

しかしこの集団による発表を通して、思いもかけなかった自分の能力や可能性に気づき、自信を得、多様な力を習得したことが発表やレポートから明確に読み取れる。そして毎年のように、同じ目標を達成する為に他者とぶつかり合いながら相互理解を深め、将来に繋がる良好な人間関係を築いていったことが覗えるのである。集団の中で自分の役割を見つけ責任を持ってやり遂げ、大きな達成感と自信を得たことは将来保育者として現場に立つ学生にとって貴重な体験となるに違いない。

この間、筆者は指導者として学生の主体性を尊重しサポーター役に徹してきたが、本学は音楽大学とは異なり、受講生の潜在能力はどの分野においても未知数で十分な伸び代があり、その資質を見きわめ導き出すことはとても魅力的な教育活動であった。

その結果どの年度においても、個人差はあるもののその変容ぶりは筆者の想像をはるかに超えたものであり、同時に「うた」の原点を見る思いであった。また、学生たちの作品に対する情熱とひたむきさは筆者にとっても大きな刺激となり、いつの間にか指導者としての立場を忘れ音楽を楽しみながら共に作品を作り上げたことを心から喜びたい。そして卒業生にはこの活動を通して習得した様々なことがらを生かすべく、子ども達と共に音楽の歓びを分かち合える指導者となっていることを願い、在学生にはそのように成長してくれることを心から期待したいと思う。

## 謝 辞

本報告書を作成するに当たり、長年に及ぶグループ活動に対して本学教職員の皆さまからいただいた温かいご支援とご理解に心から感謝いたします。特に今年度のミュージカル公演の器楽奏者として賛助して下さいった向井、長田、野口、横井、鈴木の諸先生方をはじめ、事あるごとに惜しみないご協力・応援をして下さった入試募集センターおよび教務課の皆様に衷心より

御礼申し上げます。

またオペレッタでは元「教育法」担当の浅野孝夫先生が発表の都度会場に来て下さり、様々な角度からご教示くださいました。第三者の厳しくも的確で建設的な批評は、学生達の表現力向上の大きな力となったと確信しています。そして幼稚園で行った人形劇演習では、大井先生はじめ担任の先生方から懇切丁寧な感想をいただきました。保育現場での貴重な体験に併せて、先生方や子どもたちの声を聞かせていただいたことは、保育を学ぶ者にとって極めて有意義な実践になったと深く感謝いたします。

#### 「参考・引用文献」

- 1) 山田和夫編(1981)「キャンパスの症候群」 弘文堂
- 2) 竹下英二(1987) 福島大学教育学部論集「音楽科における共同学習」
- 3) 竹下英二著(2000年)「音楽科グループ学習」 明治図書
- 4) 曾我淑人(2004) 本学FD発表「歌唱法における問題点と授業展開方法」